SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'90夏

●岡　宏子新館長の就任挨拶

＝第26回大学教員懇談会＝

●大学教員の魅力開発――FDプログラムの実践――

＝第151回大学共同セミナー＝

●現代中国の潮流

●平成元年度　教育プログラム白書／業務白書

Plain living and high thinking

No.119

館長に就任して

聖心女子大学名誉教授　岡　宏子

「セミナー・ハウスの館長」という大変なお役目を頂くことになったのは、ハウス構内の新緑が一日毎にその濃さを増して、季節は急速に晩春から初夏へと変りつつある五月末日のこと、それからそろそろ二ヵ月になろうとしている。

これまでもセミナー・ハウスとは、「浅からぬ御縁」――というのは、少々言いすぎなのかも知れないけれど――でつながってきたと思っていた。共同セミナーにもかなり長い間かかわりをもっていたし、運営委員としても、ハウスの活動に参加させて頂いてきていたので、ハウス全体の活動についてもかなり知っているような気がしていたものである。

ところが、そのような立場でかかわりを持ちながら「知っている」ように思っていた数数のことが、今度は館長という内部の一員となってみた時、「ああ、今までは分ってはいなかったのだな」の思いを味わい、「思っていたこととちょっと違うんだなあ」という微妙な理解のずれを感じさせられることを、度々経験することになった。

新しい見方で、目下新人研修中

目に映るもの、耳にするもの、入ってくる情報は、ある立場、ある考え方、感情、その他もろもろのその人間の個人的な要因で、どう把えるかということが違うということは、「心理学の研究者の端くれです」などということを改めて言わずとも、誰でも知っていることである。でも、なのである。立場が変って内部の者として、ハウスのなかを改めて見廻すと、目にとびこんできたものの中から強い印象をうけたり、耳にしたもののうちの何かに心をゆさぶられる。そのポイントが、ほんの少し違ってきたように思われてならないのである。

これまでの関係の仕方では、その見方に、多少のヤジ馬根性があったというわけではないと思う。それなりに真面目にかかわってきたつもりなのだが、内に入ってみると、その体験する些細なことの一つ一つに、何となく感じることになる感じ方のずれを、それは何かとよくよくつきつめてみることが、案外大事なことのように思われてくる、そんな毎日なのである。いわば、今のところ、何かセミナー・ハウスという存在から新人研修をうけている、「年をとった新人」の心境にある、といったらいいだろうか。

「温故知新」、そこから何が…

二十周年記念事業としてつくられた記念館が落成したのは、ついこの間なのだが、本年は開館二十五周年という、大きな節目の年を迎えた。

「温故知新」という先人の言葉を出すまでもないことだが、セミナー・ハウスの現在と、そしてこれからの活動をどう展開するのかに思いを致す時、私の心にどしりと重く改めて感じられるのは、その草創の時から二十五年の今日まで、ハウスの活動の中で発揮されてきた大きな力の数々である。

草創者とそれを支えた数多くの力、それを発展させつつ、ここまで歩みを続けられた多くの方々の頭と心と誠意、そして経済的な援助の数々を改めて辿ってみる時、それらの大きな力のお蔭で、今セミナー・ハウスがもっていられる「大きな財産」を、これからのセミナー・ハウスの歩みに、どんな風に活かしていくのが本当の「温故知新」になるのか、ということをこそ、この二十五年の節目に当って、とくと、そしてとことん、つきつめて考えていかなければならないのだと思う。

岡新館長と大学セミナー・ハウスとの関わり

◆'71年1月30～31日　第35回大学共同セミナー（白井常先生還暦記念）「アカルチュレーションと乳幼児期」と題する全体講義を行なう（**写真①**）。

◆'75年4月　共同セミナー委員に就任、翌'76年4月に委員長に。在任10年間に運営委員、指導教授として参画したセミナーは、第89回「人間はどこまで機械か―物質・生命・精神―」（'77年1月14～16日）、第100回記念「21世紀に向かって――学問と人間の問題」（'78年10月7～10日）など合計7回。

◆'75年11月1日　開館10周年記念会で名司会者ぶりを発揮（**写真②**）。その後、主要な記念式典の

①

②

①はじめて参画した大学共同セミナーで。指導教授の面々――左から4人目。右隣りは白井常氏

②開館10周年記念会で司会をする――当時の理事長・正田建次郎氏（中央）と館長・飯田宗一郎氏

あの大学の混乱期に「もう一つの大学」として、セミナー・ハウスの果した大きな役割を思う時、現在の大学、そして学生に、「もう一つの大学」は、何を提供すべきか、ということは、現在の大学の、そして学生の当面している問題点を洗い出して、セミナー・ハウスの果す伝統的な役割に、現代社会の要望の味を加える必要があろうし、国公私立の別をこえた「大学を開く」というユニークな思想と実践の二十五年の歴史に、これからのセミナー・ハウスが、その精神を体しながら、更に新しい時代のなかで、どんな具体的な活動を展開していけるか、に取り組むことこそ、まさしく二十五周年の記念行事にふさわしいことであろう。今、何かの形でセミナー・ハウスに関係をもち、セミナー・ハウスの活動を愛する者のすべての心と知、そして力を結集してつくり出していかなければならない問題なのだと思う。

セミナー・ハウスの大きな財産を…

野猿峠に猿の影はなく、近隣の緑が日に日に消えていく今日この頃、セミナー・ハウスの緑は大きな財産の一つである。この自然環境のなかで生活すること自体が、セミナーの内容に添えて、共に計り知られぬある種の力を発揮することになることは、セミナー体験者の等しく感じることである。

然し、開館から二十五年、創始者たちの卓見と誠意努力で、つみあげてきた活動の歴史が現在ハウスに与えている最も大きな財産は「人」であろう。ハウスの年報のなかに出てくる学者たちの名、名、名、その姿と活動テーマをながめていると、目まいのするような感動を覚える方々も少なくないと思う。そうして、その流れをついで、今のハウスの各種の学術・文化活動を支えている諸先生の集団、これこそ、我がセミナー・ハウスの財産の目玉でなくて何であろう。

また、協力会員校の数とその代表者である学長の名前の並んだ役員名簿は圧巻というより外はない。更に、各経済界の重鎮…このような力ある人・人・人の力を、これから先のセミナー・ハウスの活動の展開に、どんな風にお借りできるか、こんなことも真剣に考える必要があろう。更に、セミナー・ハウスの卒業生も含む各方面の専門家である千人会のメンバー、この潜在的な力も、計り知れない活力となる筈である。

これから、共に手をたずさえて…

折も折、大学審議会部会がその中間報告として、「大学教育の自由化」を鮮明に打ち出した。そこに謳われている大学教育におけるカリキュラムの自由化の問題は、各大学のこれからのあり方に多様化をもたらし専門教育と一般教育の扱い方の変化は「大学教育」とは何かが、別の意味で問われることになることもあろう。そんな流れがはじまるなかで、セミナー・ハウスの果す役割はまた新しい意味をもつことになると思う。

こんなことをとつおいつ考えながら、これからのセミナー・ハウスのことを思い、新しい展開を頭のなかで思い巡らしている時間と、一方ではフト現実に返って、セミナー・ハウスの活動の荷ない手であり、数の減ったなかで懸命な仕事をつづけている職員のあり方に思いを致し、その度に新人研修の思いを味わっているこの頃である。各方面の関係者の皆様に、研修の第一期の期間があけた頃、御相談に上りました節は、何卒よろしく御示唆と御協力をたまわりたいとのお願いを申し上げて、御挨拶にかえさせて頂きたいと思う。

③大学共同セミナー100回記念シンポジウムを司会する——左より渡辺格、佐伯彰一、板垣與一、伏見康治、岡宏子の各氏

④新館長の歓迎会で職員達に挨拶（'90年6月19日、於・交友館）

司会者をつとめる。他に、本紙の特集・座談会「開館15周年を記念して　創始の心そしてこれから大学セミナー・ハウスの初心を想う」の司会、新年交歓会（飯田館長の古稀を祝って）のメッセージ、オープン・ハウス（千人会の集いをかねて）の主賓、職員研修会の講師など、ハウスの活動の全般に亘る。

◆'82年8月、法人運営委員に就任、'89年9月委員長に。
◆'83年4月、学識経験者として評議員に就任。
◆'83年12月　開館20周年記念事業特別委員会の委員に就任。'89年10月まで。
◆'90年6月、館長、理事に就任。

第26回 大学教員懇談会

＝主題＝ 大学教員の魅力開発
――FDプログラムの実践――

期日
'90.1.20～21

▼セッションⅠ・講演
Ⅰ 高等教育の現状と大学政策
文部省高等教育局長企画課長 加藤孝治氏
Ⅱ 大学の使命と教員の能力開発
甲南女子大学文学部教授 扇谷 尚氏

▼セッションⅡ・発題
「私の授業」
東京学芸大学海外子女教育センター助教授 野田一郎氏

▼セッションⅢ・ワークショップ(分科会)
「大学教授法の実際」(ビデオによる実例紹介とディスカッション)
1. 人文・社会科学系
上智大学外国語学部教授 蠟山道雄氏
2. 自然科学系
早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎氏

▼セッションⅣ・発題
「カリキュラム概論」
桜美林大学国際学部教授 井門富二夫氏
「一般教育と専門教育の総合」
千葉大学教養部教授 坂井昭宏氏

▼セッションⅤ・発題と総括討論
「大学教員の自己評価」
国際基督教大学教養学部教授 原 一雄氏

▼運営委員
《委員長》
早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎氏
国際基督教大学教養学部教授 絹川正吉氏
東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢氏
東京女子大学文理学部教授 福田一郎氏
千葉大学教養部教授 坂井昭宏氏
お茶の水女子大学家政学部教授 中島利誠氏

▼参加者53名（25校）
（運営委員・講師を含む）
国際基督教・上智・日本・立教（各4）、千葉・中央・東京女子・東海（各3）、東京学芸・お茶の水女子・電気通信・大妻女子・法政・早稲田（各2）、金沢・杉野女子・成蹊・日本女子・武蔵工業・西南学院・甲南女子・桜美林・昭和学院短期・青森明の星短期・愛知女子短期（各1）、その他（2）

◇

これまでの大学は、第一級の研究者は即ち良き教育者であるという研究と教育の予定調和説を暗黙の前提に、教員はもっぱら研究に専念するのみで、講義内容がわからないのは学生の責任だとする「自己責任原理」に基づいていた。しかしこれからは、学生が良き市民としてあるいはより完成された人間として成長できるように援助することが大学教育の基本的なあり方になっていかざるをえない。大学教員は研究者であると同時に教育のプロであることが要求されている。これまで大学教員は個人的に研究能力の開発に努めてきたが、これからは教授団の資質開発（FD＝Faculty Development）として公的に取り組むべき課題になりつつある。こうした趣旨のもとに全国でも初めてのFDプログラムを41名の一般参加者を得て開催した。

◇

そもそもこうしたFDプログラムが最初に話題になったのは、大学教授法をめぐる議論があった第二〇回懇談会「時代の変遷に伴う大学の将来像」の時であった。その後も懇談会開催のたびにその必要性が論じられてきたが、第二五回懇談会の時にFDに関するアンケートが実施され、多くの参加者からFDプログラムの開催を求める強い要望がセミナー・ハウスに寄せられた。これを受けて、'89年4月に大学教員懇談会企画委員会の中にFDプログラム小委員会が設置され、計画立案の作業が開始された。

今回、参加者に配布された『大学教員研修マニュアル』（B5判・三八〇頁）は、この小委員会の成果の一つであり、また製作費に国立大学の教育方法等改善経費による助成があったことを記し、関係各位に感謝の意を表する次第である。

◇

初日のセッションⅠでは、まず急用で欠席された文部省高等教育局長に代わって、企画課長の加藤氏が「高等教育の現状と大学政策」について講演された。

大学審議会を中心に目下、学部教育の充実と改革の論議が展開されているが、今後の大学政策の方向について「大学を大枠で支配していた大学設置基準も大綱化、簡素化され、それぞれの大学、学部の自由度がこれまで以上に増加することになるだろう」と説明された。こうした規制緩和や18歳人口の激減期をひかえ、大学はみずから水準を維持するためにアクレディテーションに努めるなど大学教育の改善に自主的に取り組んでいかなければならない。

続いて一般教育学会会長の扇谷氏は、日本では学生も研究者もともに学問を追究する者であるという前提があったが、大学の大衆化の中で次第にこうした同質性が崩れ、学生をどうイメージしたらよいかがわからなくなっていると、教員の能力開発の必要性について講演された。

「授業科目はあるけれども授業は展開しない」という状況の中で「学生が何を考え、何を見ているのか、学生と同じレベルまでさがって一致点を見付け、そこから学生を一歩ずつ押し上げていくこと。教員は自分の研究経験なり、生活経験を再構成してそれを学生と分かち合う努力をすることが大事である」と教員の授業改善努力の必要性を強調された。

◇

小、中、高校までの教員は学習指導者としての研修・研究を積んでいるし、常に教授法の改善や工夫に努力がなされ、授業研究が盛んである。しかし大学教員は、全くといってよいほど教授法に関心を持っていない。セッションⅡの「私の授業」と題する発題で、大教室における「私語」の問題を事例に授業方法の改善について報告された野田氏は、「義務教育ほど丁寧でなくても、一人ひとりの学生を大事にし、日々の授業を工夫することは大学教員の責務である」と述べ、①授業への導入を大切にする②教育に対する教師の信条を語る③授業のカリキュラムを配布する④学習方法を多様化する⑤成績評価の観点を示す⑥教材の工夫をする⑦ゲスト講師を導入する⑧出席の確認をシールで行なう⑨授業評価を学生にさせるなど指導方法改善の一端を紹介された。

野田氏の発題の後、人文社会系と自然科学系に分かれて実施されたワークショップでは、蠟山、示村の両氏がご自分の授業をビデオで紹介され、よりよい授業のあり方をめぐって活発な討論が行なわれた。

◇

セッションⅣでは、アメリカの大学で実際にカリキュラムを組んだ経験をお持ちの井門氏が、カリキュラム論を展開された。日本の大学では、カリキュラムとは大学設置基準に沿って授業科目を配置する程度のこととしか考えられていない。しかも大学の自治、学問の自由の美名のもとに学部ごとに壁を作り、学生が各自の学習目標に従って、柔軟にカリキュラムを組むことを阻害している。そもそもカリキュラムとは「大学の教育目的や学生の学習意欲に基づきながら、それぞれの専門分野の様式に従って知識の伝達を行なうためのある種のガイダンス上の枠組であって、教育目的や社会の変化に応じてどんどん組み替えるべきだ」との見解を示された。

◇

セッションⅤでは、国立大学協会教養課程特別委員として教養課程の改革に詳しい坂井氏からカリキュラムのあり方についての発題があった。人文・社会・自然の三分野にわたって幅広い知識を身に付けるという従来の「分離分散型」のカリキュラムでは、一般教育の真の目的を実現できない。坂井氏は、工学系の単科大学に多い「2系列主義」、上智大学の人間学、桃山学院大学の人権講座などに代表される「コア型」、名古屋大学の「主題別授業」、京都大学教養部に見られる「副専攻」制など各大学で展開されている教養課程改善の試みを紹介された。大学教員は専門を究めたいという気持が強く、ただ一般教育の枠組だけを改革しても中身がそれに伴わないのが実情なので、一般教育のアイデンティティを確保しながら、大学4年間の学部教育を整合的に組織化し、体系化していくためには、大学教育の構成要素を、一般教育（非専門教育、自己の専攻しない学問分野に属する授業科目群）、専門教育（基礎専門）、共通基礎（外国語、体育実技など）の三つに分けて考えることが必要だろうと氏は主張された。

◇

現在の大学では、専門の研究業績が教員評価の中心であり、教育の改善努力など教育能力については十分に評価されていない。セッションⅤで原氏は「教員の自己評価」の問題について講演された。

教員の自己評価の目的は何か。教員の勤務評定をすることではなく、あくまでも教員の専門的資質（Professional Competence）を高めることである。「教員各人が大学教員としての権利と義務に対する内在的規範に則って評価するものでなければならない。多くの教員が持っている教育方法改善の経験を個人的な経験にとどめずに、共通の認識にまで発展させることが大事である。いずれにしても、評価を嫌う日本の風土の中で、教員評価のシステムが日常の研究活動の中に自然に入るようになることを期待したい」と述べられた。

◇

セッションⅤの総括討論では、セッションⅢで行なわれたワークショップでの議論についての報告が代表者からなされた後、示村運営委員長が「教育の方法や技術は、教わったからといってすぐに身に付くものではない。自分自身の工夫によって改良していくことが特に重要である」と今回のFDプログラムを一つの契機に、教員各人が日常的実践の中で自発的に取り組んでいってもらいたいと総括された。

最後に、参加教員から忌憚のない意見が寄せられているので、紹介しておきたい。「若手教員の参加が少なく、現場の声が反映されていない（教育歴5年以下は11名であった）」「原理論よりも具体例を豊富に盛り込んでほしかった」など各自の日常の苦心を出し合う時間が持てなかったとの指摘がある一方、「貴重なマニュアルを入手できた」「大学教育の基本的知識が得られた」「FDを定期的に開催し、新任教員は必修とすべきだ」など高い評価も寄せられた。

なおこの懇談会の詳細については『第26回大学教員懇談会記録』（9月刊行予定）をご覧いただきたい。また『大学教員研修マニュアル』は実費（一五〇〇円）にて頒布している。申し込み・問い合わせは当企画室まで（〇四二六―七六―八五三二直通）。

第151回 大学共同セミナー

＝主題＝ 現代中国の潮流

期	日
'90.3.10～11	

▼ゲスト講演
「いま中国は」
朝日新聞前上海支局長・ミステリー作家　伴野　朗氏

▼全体講義
冷戦崩壊と中国民主化の課題
――アジア社会主義の運命――
アジア経済研究所研究主任　加々美光行氏

▼講義
Ⅰ　建国四〇年、改革一〇年の中国経済
――天安門事件の意味するもの――
横浜市立大学商学部教授　矢吹　晋氏
Ⅱ　農民にとっての経済改革と民主改革
成蹊大学法学部教授　宇野重昭氏
Ⅲ　中国における政治と軍事
――六・四武力鎮圧を中心に――
杏林大学社会科学部教授　平松茂雄氏

運営委員
東京大学法学部教授　五十嵐武士氏
東京経済大学経済学部助教授　桜井哲夫氏

▼参加者96名（内女子32名）
東京（11）、成蹊・早稲田（各8）、慶応義塾・中央（各7）、上智（5）、東京外国語・津田塾・立教（各4）、筑波（3）、東京医科歯科・学習院・東京女子・日本・明治・明治学院・独協（各2）、横浜国立・東京都立・杏林・帝京・東京理科・日本女子・法政・大東文化・東洋英和女学院・二松学舎・昭和女子（各1）、その他（10）、以上28校

'89年6月の天安門事件は世界に大きな衝撃を与えた出来事であった。東欧諸国では共産党の支配体制が揺らぎ、民主化の動きが高まった。しかし、中国はそうした時代の流れとは異なる選択をしたのである。

日本は中国に対して、他の先進諸国と歩調を合わせ、人権や民主化の問題で批判できない歴史的関係がある。また一方で、日本で学ぶ留学生や就学生、難民を装った中国人の入国などを通して、中国の問題は日本にいても極めて身近に感じられるようになった。

現在、中国で何が起きているのか。「冷戦の終焉」に取り残されそうなアジアで日本はいかに進むべきか。大学の枠を超えて、「自分はどのような時代に生きようとしているのか」（五十嵐氏）を共に考えようとするのが今回のセミナーの主旨である。

時宜を得た企画に対して96名の参加者が集まり、中国問題への関心の高さを改めて伺わせたセミナーであった。参加者の中には、中国や台湾からの留学生10名が含まれており、終始、真剣な議論が展開された。

◇

昨年、4月15日の胡耀邦の急死をきっかけとして急激に高まった民主化運動は、経済的開放・自由化と一党支配体制による社会主義の矛盾と危機を明らかにした。

この民主化運動の性格について、セミナー冒頭の全体講義の中で、加々美氏は「今回の運動を起こした知識人・学生に新しい意識があった」と指摘し、従来の運動には見られなかった動きを強調した。それを、象徴するものとして、氏は4月27日の北京でのデモ行進をあげる。このデモ行進は参加者一五万人、行進距離五〇キロ、行進時間一五時間に及ぶ大規模なものであったが、両脇からのピケットで隊列を守り、非暴力で整然とした行進が行われた。「このデモは北京の人々に感動を与え」「精神的指針を呼びさます契機となった」と氏は言う。この民主化の動きは天安門事件による武力鎮圧で抑えられるが、事件後、中国を訪れた同氏は、「人々は何ら精神的に屈服していず、むしろ憤怒の感情を持っており、自分たちにこそ正義があると考えている」と紹介し、今日の人々の様子が以前の弾圧時におけるそれとは明らかに違う状況であることを指摘した。

宇野氏は、伝統的なものが外来的インパクトにより展開・発展するという内発的発展論の立場から、郷鎮企業の発展や「五好家族」といった倫理革命、農民意識の変化が現在の中国に見られることを指摘し、「土着的民主化」の可能性を説いた。一方、矢吹氏は天安門事件は「社会主義の優越性論」の崩壊と見て、中国のとった経済政策の問題点を指摘した（氏の講義の要約を別掲）。

また、軍事面について平松氏は「毛沢東の軍隊から近代的正規軍への改革が進

シンポジウム――左から五十嵐，平松，加々美，宇野，桜井，矢吹の諸氏

〔講義Ⅰ　要旨〕

建国四〇年、改革一〇年の中国経済

――天安門事件の意味するもの――

横浜市立大学商学部教授
矢吹　晋

中華人民共和国の成立は一九四九年十月一日であるから、昨年の一九八九年はちょうど建国四〇周年であった。正にその年に天安門事件は起こったのである。私はこの事件の背景を中国現代史を辿りながら、中国の経済発展の文脈の中で考えてみたいと思う。中国現代史は次のように大きく三つに区分することができる。まず一九四九年の建国から六五年までの一七年が第一期であり、第二期は六六年から七六年までの文革期の一〇年である。この一、二期を合わせた二七年が毛沢東の君臨した時代であった。その後二年半ほど華国鋒が主席をつとめた過渡期があり、七九年から八九年まで「改革と開放の一〇年」と呼ばれる鄧小平の時代がつづく。

■大躍進と文化大革命がもたらしたもの

毛沢東時代を特徴づけるものは大躍進と文化大革命であったが、これらが中国経済にもたらした結果は極めて深刻であった。大躍進運動は人民公社政策が推進された一九五六年から六〇年までの時期をさしている。人民公社は「共産主義に至る組織形態」として位置づけられ、共産主義社会が明日にでも実現するという熱気が大衆を動かし、次々に意欲的な建設が進められたのであった。毛沢東時代末期から華国鋒時代にかけて政治局の常務委員であり、周恩来の助手として、経済面で大きな仕事をしていた李先念は、事後に次のような評価を下している。「われわれが過大な目標を掲げ、デタラメな指揮をやり、共産風を吹かせる誤りを犯した」ことにより、国民所得を一二〇〇億元失ったと推計される。この一二〇〇億元という数字は当時の中国の一年分の国民所得（中国語では国民収入と言う。MPS方式―Material Product System で計算されており、生産に直接かかわらないサービスは含まれない）に相当する。

さらに文化大革命について李先念は、「政治上国家と人民にもたらされた災難は別にして、経済上、ある同志の推計によれば国民所得で見て五〇〇億元失った」と述べている。六〇年代の国民所得は約一六〇〇億元であるから、五〇〇億元はその三年分にも相当し、毛沢東時代の二七年間で実に四年分の国民所得を失った計算になる。これは大きな戦争による被害にも匹敵しよう。

■中国の経済建設と国際環境

以上のような経済面の損失のみならず、人民公社の失敗は食糧不足をもたらし、餓死者（主として嬰児と老人）は一五〇〇万人とも二〇〇〇万人とも推計されており、惨たんたる結果を招いた。明らかにこれは毛沢東の政策の誤りによるものであるが、なぜ、このような政策を彼がとったのかといえば、当時の国際環境が深く関わっていた。建国間もない中国は朝鮮戦争に参加し、その結果としてアメリカによる中国封じ込め政策を招いた。中国は軍事力の強化を図らねばならなかったばかりでなく、西側による経済協力の芽はこれによっていっさい摘まれた。更に、六〇年代を通じて中国はベトナム戦争による様々なインパクトを受ける。ベトナム戦争を直接に戦ったのは米軍とベトナム人であったが、ベトナムの後方基地のような位置を占める中国は、アメリカから見れば仮想敵国であった。こうして中国はベトナム戦争の間、米中戦争を想定した経済建設の道をひたすら歩むことになった。

例えば上海や北京のような大都市に掘られた地下壕もそうした経済建設の一つである。この膨大なエネルギーが、もし、地下鉄の建設にふり向けられていたならば、大都市の交通事情は格段によくなっていたであろう。また、当時、「三線建設」構想と呼ばれた重工業基地の建設がある。予想される米中戦争で真先に爆撃されるのは沿海にある上海であると考え、これを第一線とし、もう少し内陸に入った辺りを第二線、そして最後の砦を四川省周辺に置き、通常兵器によるゲリラ戦術で戦おうという国防構想がこれである。日本の経済成長を支えたものが、臨海工業地帯であったことを考えれば、これはおよそ効率の悪い経済建設であった。そもそも経済効率を考える余地もない生きのびるための建設なのであった。

ところが毛沢東の死後、中国は一転して開放政策に踏み切った。周辺の諸国が経済的に極めて豊かになっている、という事実に気づいて驚愕した。このことを端的に示すのが、「二〇世紀末にGNP一人当り平均一〇〇〇ドルをかちとることができれば、小康を得た水準と言える」という鄧小平の七九年一月の発言である。当時の中国のGNPは約二五〇ドルであったが、香港はすでに四〇〇〇ドル以上に達しており、シンガポールは四四〇〇ドル、台湾も一〇〇〇ドルを超えていた。私はこのGNP格差は非常に重要であると考える。なぜならば、中国はアジアNIEsに破れたのであり、「社会主義の優越性」論の第一次崩壊を意味するからである。

■社会主義の優越性論

この「社会主義の優越性」論は、資本主義では生産関係が生産力の発展を制約するが、社会主義では生産関係が生産力の発展を促進するので、資本主義よりも速やかな経済発展が保証される、というスターリン時代に出来た教義である。これには原理的な誤謬が含まれている。『資本論』に「商品が貨幣を生み、資本は労働力を商品化することで生産の主体となる。資本の利潤追求は生産過程における効率追求となり、それは労働疎外、搾取、自然破壊、景気変動を伴いながら、技術的合理化を促進する。他の社会形態のもとでは資本のような主体がなく、盲目的な効率追求は起こらない」とあるように、あらゆるものを利潤追求という一点にしぼっていくシステムが資本主義である。従って、生産力発展、効率追求至上社会体制として、資本主義を超えるシステムはおそらく存在しない。

しかし、社会主義の優越性を示すような事実も一時は見られた。三〇年代の工業化を通して独ソ戦争を戦い、一九五七年のスプート

（8頁につづく）

行中」で、天安門事件以後は軍事改革が停滞しており、さらに、昨年来、一九六〇年代の「雷鋒に学べ」という動きが復活していることを指摘した。これは近代化とは逆の動きで、氏は解放軍の「特異な体質」と言う。

以上の各講師による講義を踏まえて夜のプログラムは、クジ引きによりふり分けられたグループ別討論に移った。

◇

二日目午前のシンポジウムでは、今後の中国の情勢について広範な議論が展開された。

中国には伝統的に専制的土壌が存在するが、伝統と発展のかかわりをめぐって次のような発言があった。

一九八八年に全国放映され、反響をまき起こしたテレビ番組「河殤（かしょう）」では伝統文化の全面否定なしには中国の発展はありえないという立場が示されたが、もう一方では、そのような伝統の全面否定ではなく、伝統文化の再生と革新をはかっていく中で発展を考えようとする立場がある。

加々美氏は「多元的民主主義」の可能性を、宇野氏は「専制型民主主義」の必要を説く。両者は西洋型ではなく、中国に適合した民主主義という点で共通性をもつ。しかし前者は、アジア的専制を克服した中国型の新しい民主主義として考えられており、後者は、この先五年・十年といった比較的短い期間内で必要とされる啓蒙専制スタイルによる民主主義と

して考えられている。

また、経済の発展のためには強権体制、「新権威主義体制」が必要である（矢吹氏）という見解も出されたが、民主化を考えていく上で論点の分かれるところであろう。

この他に、中国における二重価格やマーケットメカニズムのコントロールの問題、日本の対中国政策など、議論は多岐にわたったが、紙面の都合で残念ながら割愛し、改革については「体制内改革の道がいちばん高い」（加々美氏）、「指導者層は五年以内位に交代し、今世紀末位には大きな転換を迎えるであろう」（矢吹氏）という指摘があったことを付言しておく。

最後にゲスト講演で伴野氏はジャーナリストとして観て体験した中国について語られ、現代中国の抱える問題として①民主化の実現可能性、②増大する人口、③インテリ層をめぐる諸矛盾とその対応の三点をあげ、中でも人口問題の切実性を指摘し、一人っ子政策が大家族制度の崩壊につながる大きな社会問題となることに言及された。

◇

今回のセミナーの特別ゲストとして伊東正義氏が予定されていたが、政治日程の都合で実現しなかったことは残念であった。一泊二日の限られた討論であったが、「中国という身近なようではあるが実は理解し難い国家の持つ様々な困難性がわかった」「中国の問題は日本の問題、そして世界の問題でもあることに気付き始めた」という声にあるように、参加者は中国を様々な角度から丹念に見ていくことの必要性や歴史の可能性をじっくり探る姿勢を学び取ったに違いない。

（7頁よりつづく）

ニクの成功の時点までは、ソ連の経済力はアメリカを上回る、という認識さえかなり広く行なわれていた。フルシチョフの〝アメリカに追いつき、追い越せ〟というスローガンを踏まえて、毛沢東は〝イギリスに追いつき、追い越せ〟を目標に掲げ、大躍進という政策を推し進めたのであった。この時、毛沢東が生産力の内容として考えていたものは粗鋼であった。五七年のロシア革命四〇周年記念でモスクワを訪れた毛沢東は、五二〇万トンの粗鋼を五年後には一〇〇〇万～一五〇〇万トンに、更に五年後には三五〇～四〇〇〇万トンに高めることによって一五年後にはイギリスに追いつき、追い越すことができると展望したのであった。しかし結果は、前述したように中国は四年分のＧＮＰを失った。

中国が採用した経済システムの第二の問題は、アジアＮＩＥｓとの比較において、ある一定の段階で生産力発展の水準が低い、という点とともに、将来の発展可能性の面でも成長率が低い、という点にある。より重要な点は後者である。計画経済のシステムの中には、経済成長をつき動かすようなモチーフがないからである。日本をはじめ、アジアＮＩＥｓが伸びてきた最大の要因は、企業主体による競争、弱肉強食の原理に他ならない。

■現代社会主義の歴史的意味

では、社会主義の運命は尽きたのか。議論の一つは、ソ連であれ、東欧であれ、アジアであれ、失敗したのはいずれも後進社会主義であるから、社会主義の可能性はまだ存在する、というものである。確かに先進国は社会主義を経験していないので、議論としては成立し得るであろう。しかし後進社会主義の中にも社会主義の原理としての普遍性を見出すことはできるはずである。問題は経済効率を追求する主体を作り出すことができず、民衆の自発性が失われ、技術革新には極めて不適応な官僚機構が生れてしまった、という社会主義の政治的＝経済的システムにあると私は考える。七九年の鄧小平による政策転換は、中国はアジアＮＩＥｓに敗けた、という一種の敗北宣言であったと言ってよいだろう。社会主義に対する「信念の危機」が語られるようになったのはこの頃からである。はじめはごく一部の知識人が抱いていた危機意識であったが、「改革と開放の一〇年」に蓄積された矛盾は天安門事件によって改革の限界を顕在化させたのである。その意味で、人民の軍隊による人民の虐殺であった天安門事件は、「社会主義の優越性」論の第二次崩壊を象徴するものであった。

ロシア革命以後、資本主義のもつ矛盾を解決するもの、即ちオルターナティヴとして追求されてきた社会主義は歴史的転換に直面している。皮肉にもかつて社会主義が課題としていたことのほとんどすべてを、資本主義の体制は解決してしまった。完全雇用の達成、所得格差の是正、福祉政策などにより資本主義自体が変わった。その意味で、現代社会主義はその歴史的使命を半ば終えたと言ってよい。しかし、資本主義の資源浪費的性向は改められていない。効率至上のもと、人類社会は地球環境破壊への道を急いでいる。南北問題解決の見通しもたっていない。

（文責・編集者）

参加学生の感想から

密度の濃いセミナーの二日間

東京外国語大学4年
石崎　菜生

大学共同セミナーに参加したのは今回が初めてです。専攻の関係もあって六・四天安門事件から受けた衝撃は大きかったため、テーマを知って参加しました。

それぞれ異なった立場から現代中国へのアプローチを提供して下さった先生方の講義・講演はさすがに内容の濃いものでした。ブルジョア・デモクラシーに限らない多様な民主主義の可能性、ニューデタントの虚偽性、「社会主義の優越性」のもつ原理的誤謬、特異な性格をもつ中国軍の武力鎮圧後の行方、中国社会の近代化に向けての内発的可能性、厳しい政治環境から生まれた中国人の「明哲保身」、プロレタリア独裁と啓蒙専制の関係など、幅広い問題が提出されました。

グループ・ディスカッションでは伝統文化の捉え方から中国人留学生の処遇まで、いろいろな点について積極的な発言があり、参加者の方々の問題意識の強さに圧倒されました。ディスカッション終了後も他のセミナー室を渡り歩いて様々な方と出会い、時間が経つのも忘れて話し合えたことは大きな収穫です。中国や台湾からの留学生の方が多数参加されていたおかげで、改めて日本人として隣国の問題を考える自分の立場を吟味することができました。社会人の方も見えており、多様なバックグラウンドを持った人達と学問をする上での基本的な立場について意見を交換する機会を得たことは有意義でした。非常に密度の濃い二日間であったと思います。

ただ、テーマのせいもあってか、違った専攻の人達が集まったメリットがディスカッションの中で十分活かされていなかったきらいはありました。学問をする上で大切なのは、対象について議論するとともに、それを研究する各人のアプローチの仕方を検討することだと思います。なぜこのテーマに興味を持ったのか、どのような方法で研究を進めたらよいか、そうした面での議論があれば理想的であり、大学共同セミナーの趣旨にもかなうのではないでしょうか。

もう一つぜいたくを言わせていただくとすれば、グループ・ディスカッションの行なわれたセミナー室がそれぞれ離れた場所にあり、行き来がしにくかったことは残念でした。各グループのディスカッションの成果を交換し合える機会がもっとあればよかったと思いました。

平成元年度 教育プログラム白書

平成元年度は、表1に示すとおり、全8回のプログラムを実施した。改めて、これらのプログラムの企画・運営に当たられた共同セミナー委員会、国際プログラム委員会、大学教員懇談会企画委員会の委員と、各プログラムの指導教授・講師諸氏に、この紙面を借りて感謝を申し上げる次第である。

全8回のうち、4回は大学共同セミナーであり、大学合同セミナー、国際学生セミナー、大学教員懇談会各1回ともに前年度に準じたが、前年度まで実施してきた大学院共同セミナーは、開館20周年記念館の落成記念シンポジウムの企画にふりかえられ、大学教員懇談会の延長線上で実施された。

◇

表2は学生を対象としたプログラム計6回の参加状況である。ゼミ単位の参加形態をとる大学合同セミナーの参加者は、表中、内数で（ ）内に示した。

まず、参加者総数は四六〇名で前年度より二名増加した。昭和60～62年度の三〇〇人台にとどまっていた状況から脱して、2年目である。表には示されていないが、大学共同セミナー4回の参加者は三〇四人で、前年度より六二名増加しており、1回平均七六名となった。これは表1に見るように、第150回「ユング心理学――心の深層をさぐる――」、第151回「現代中国の潮流」に学生の反響があったからである。

また、表は紙面の都合で割愛するが、専攻別では、理科系の比率が九・六％（前年度三・三％）に延びているのが目立ち、学年別では、一年生の比率が一九・三％（前年度八・五％）、実数にして五〇人も増加している。ちなみに最も多い分布は、専攻別で社会科学系の五一・八％、学年別で三年生の三三・三％である。

〈表1〉平成元年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回数	期間	主題	指導教授	参加人員
No.148（1）	平成元年 6月16～18日（2泊3日）	資源の長期的展望――人類は21世紀を生きのびられるか――	深海博明、原田憲一、室田泰弘、*室田　武、*竹内　啓	49名（18校）
No.149（2）	11月10～12日（2泊3日）	祭りと文化	加太こうじ、松平　誠、蔵持不三也、渋谷利雄、吉見俊哉、*陣内秀信	46名（17校）
No.150（3）	12月15～17日（2泊3日）	ユング心理学――心の深層をさぐる――	樋口和彦、三木アヤ、岸　良範、*小川捷之	113名（38校）
No.151（4）	平成2年 3月10～11日（1泊2日）	現代中国の潮流	加々美光行、矢吹　晋、宇野重昭、平松茂雄、伴野　朗、*五十嵐武士、*桜井哲夫	96名（28校）

■大学合同セミナー

No.12	11月24～26日（2泊3日）	90年代世界の構造変化と日本の役割	*高柳先男、臼井久和、*滝田賢治、戸田三三冬、竹田いさみ、川原　彰	71名（3校）

■国際学生セミナー

No.16	10月27～29日（2泊3日）	〈開かれた〉日本・総点検――21世紀の世界と日本――	大来佐武郎、大島賢三、ロバート・オアー、毛里和子、秋野　豊、広野良吉、出根裕子、内田　満、（菊地　靖）、（熊田禎宣）、（宇佐美　滋）、（上田　孝）、（添谷芳秀）	85名（27校）

■大学教員懇談会

No.26	1月20～21日（1泊2日）	大学教員の魅力開発――FDプログラムの実践――	加藤孝治、扇谷　尚、野田一郎、*宮腰　賢、蠟山道雄、*坂井昭宏、*示村悦二郎、*絹川正吉、*福田一郎、*中島利誠、井門富二夫、原　一雄	53名（25校）

■記念シンポジウム

	7月7～8日（1泊2日）	現代における大学の役割――日本の大学は国際化に耐えうるか――	入江　昭、植村泰忠、坂部　恵、岡部達味、（蠟山道雄）、（竹内　啓）、（江沢　洋）（宇佐美　滋）、（示村悦二郎）、（坂井昭宏）、（熊田禎宣）、（三輪公忠）	39名（28校）

＊印は運営委員を兼ねた指導教援。（　）内は運営委員。

〈表2〉平成元年度教育プログラム参加状況

（計6回：第148～151回大学共同セミナー、第12回大学合同セミナー、第16回国際学生セミナー）

【大学別参加状況表】

大学名	男	女	計
筑波	3	9	12
埼玉	2		2
千葉	2		2
東京	29	4	33
東京医科歯科	2	1	3
東京外国語	2	9	11
東京農工	3		3
東京工業	2		2
お茶の水女子		4	4
一橋	9	3	12
横浜国立	6		6
山梨	1		1
東京芸術	1		1
国立小計（13校）	62	30	92
東京都立	2	3	5
公立小計（1校）	2	3	5
青山学院	1	5	6
学習院	2	1	3
杏林	1		1
慶應義塾	18	12	30
国際基督教	1	1	2
駒沢		1	1
芝浦工業	1		1
上智	11	20	31
成蹊	8	4	12
聖心女子		1	1
中央	35(25)	13(9)	48(34)
津田塾		11	11
帝京	3	1	4
東京女子		8	8
東京農業	1	1	2
東京理科	3		3
日本	5	1	6
日本女子		8	8
法政	4	1	5
明治	7	5	12
明治学院	2	4	6
明星	1		1
立教	17(7)	11(4)	28(11)
早稲田	37	15	52
大東文化	2		2
独協	17(15)	13(10)	30(25)
東洋英和女学		1	1
二松学舎		1	1
昭和女子		1	1
和光		1	1
放送	1	1	2
国学院	1		1
千葉商科	1		1
東京国際		2	2
神戸女学院		1	1
花園	1		1
国際	3		3
私立小計（37校）	184	145	329
都立商科	1		1
東京電気		1	1
明治大学		1	1
短期小計（3校）	1	2	3
東京工業高専		1	1
その他	19	11(1)	30(1)
総合計（55校）	268(47)	192(24)	460(71)

（　）は内数で大学合同セミナー参加者数。総数460名のうち留学生は29名。

●収容定員が二七〇床から三一〇床に

平成元年度は開館20周年記念館（インターナショナル・ロッジ、通称、「記念館」）が新設されたので、宿泊施設の収容定員が四〇床加わり、三一〇床に増加した。

●年間の宿泊利用者五万二、一七九人

宿泊利用者数は表1に示すとおり、延べ五万二、一七九人（月平均四、三四八人）グループ数は一、〇七六（同九〇）であった。うち、記念館の宿泊利用者は三、九六〇人で、当初目標としていた三、〇〇〇人を超えたが、その大半は従来からの利用者が既存の宿舎から移ったにとどまり、宿泊延べ人数は、四〇床の増加にもかかわらず、前年度より三五〇人減少するという結果に終った。

●グループ別の利用状況

図1に示すとおり、「会員校」（平成二年三月末現在で、協力会員校・準協力会員校は計六五校）の利用は、全体の五二％（前年度は五三％）である。「大学連合」には会員校の教員や学生が参加する集会が多く含まれているので、「会員校」の実質的な利用率は更に高くなる。「会員校」及び「大学連合」の比率は前年度より各々一％減少し、その分だけ「非会員校」の比率が増えた。

表2に、協力会員校の最多利用10校をゼミ回数及び宿泊延人数別に示した。ちなみに前年度の一位と二位が入れかわり、中央大学がトップとなったが、宿泊延人数三、四四五人は前年度の一位より、いっきょに一、四七四人も増加した。

なお、一時期減少傾向を示した「学術教育団体」は、前年度に八年ぶりに一〇％台を回復し、本年度も引き続き一四％をマークした。

●年間の稼働率四九・二％

年間の稼働日数は、6月の施設整備期と年末年始の休館日を差し引いた三五四日であった。宿舎の平均稼働率は四九・二％で、前年度の五五・一％を約六％下回った。図2に月別の稼働率を示したが、6月（前年度五五％）、11月（同五〇％）、2月（同四三％）の減少が著しい。特に学年末試験と厳寒期が重なる1月は最も低く、二一％であった。

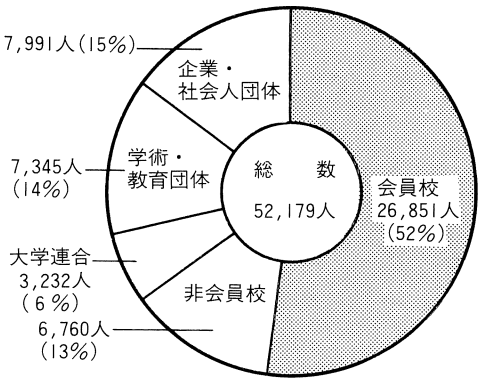
〈表1〉利用者別宿泊人数・ゼミ回数　（　）内は前年度

利用者＼人数・回数	ゼミ回数	比率（％）	宿泊延人数（人）	比率（％）	1団体平均人数
会員校	532 (554)	49.4	26,851(27,778)	51.5	34(34)
非会員校	180 (143)	16.7	6,760(6,638)	12.9	29(29)
大学連合	46 (41)	4.3	3,232(3,824)	6.2	48(48)
学術・教育団体	115 (90)	10.7	7,345(7,464)	14.1	47(47)
企業・社会人団体	203 (218)	18.9	7,991(7,825)	15.3	23(23)
合計	1,076(1,046)	100	52,179(52,529)	100	33(33)

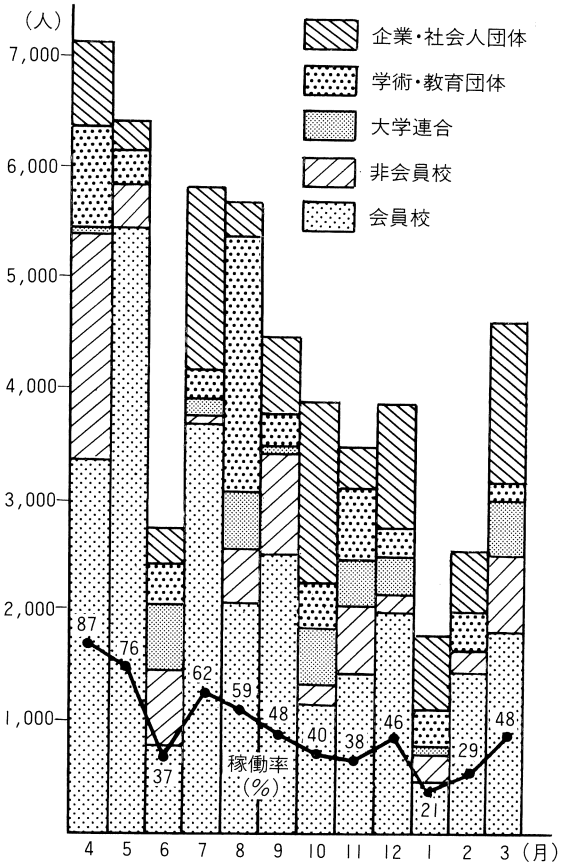
〈表2〉協力会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	中央大学	55	1	中央大学	3,445
2	早稲田大学	39	2	早稲田大学	1,666
2	東京都立大学	39	3	東京都立大学	1,099
4	駒沢大学	27	4	東京薬科大学	1,066
5	東京学芸大学	25	5	立教大学	924
6	東京大学	23	6	東京学芸大学	889
7	青山学院大学	20	7	津田塾大学	867
7	法政大学	20	8	明星大学	757
9	立教大学	18	9	駒沢大学	681
10	東京理科大学	17	10	青山学院大学	674

〈図1〉利用グループ別宿泊延人数



〈図2〉月別・利用グループ別宿泊延人数と稼働率



新館長に岡宏子聖心女子大学名誉教授が就任

中川理事長兼館長は理事長専任に 飯田名誉館長を特別顧問に

5月31日に開催された第75回理事会・第55回評議員会は、開館して25年を迎える法人の役員人事を議し、以下の決定を行なった。

これまで館長を兼務されていた中川秀恭理事長が5月末日で館長を退任し理事長専任となり、新たに館長には岡宏子聖心女子大学名誉教授を選任し、同氏が6月1日付で就任された。

なお、岡館長の就任挨拶は巻頭頁を、その他の役員人事については別掲の理事会・評議員会を参照されたい。

第75回理事会・第55回評議員会

'90年5月31日／神田・学士会館

〔出席者〕

（理事）中川秀恭、飯田宗一郎、小岩健介、鈴木皇

（監事）阪上信次

（評議員）岡宏子、伏見康治、川原栄峰、小谷正雄、宇野重昭、吉田亮、加納六郎、朝倉孝吉、中嶋嶺雄

委任状による者＝理事一七名、監事＝一名、評議員七三名（敬称略・順不同）

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事が進められた。小岩専務理事から各議案について逐次説明がなされ、質疑応答が交わされた後、各議案をそれぞれ可決承認した。

▽平成元年度の事業報告案及び決算報告書案に関する件

事業収入は記念館の事業開始に伴い、宿泊利用者数の減少を見たにもかかわらず、前年度より約一、二〇〇万円増収となった。これには値上げの分が預かっている。詳細は別掲の収支計算書に示すとおりである。

なお監事から平成元年度の会計・業務とも適法適正に処理されているとの監査報告があった。

事業報告として特記すべきものでは、「開館20周年記念館」の落成と同落成記念式典、記念シンポジウムの開催、『大学は変わる―大学教員懇談会15年の軌跡―』の刊行がある。また、大学教員懇談会のFD（ファカルティ・ディベロプメント）プログラムが、千葉大学の「大学教育方法等改善経費」による協力で実施され、次年度も東京工業大学からの援助が得られる見通しがあることなどが挙げられる。

▽評議員人事に関する件

学長交替により、幸田三郎共立女子大学長、平井俊栄駒沢大学長の両氏の新任とこれに伴う剣木亨弘、桜井徳太郎両氏の退任。財界関係者として安西浩氏の死去に伴う渡辺宏・東京ガス（株）会長の新任。箕輪圓・前京王電鉄（株）相談役の退職に伴う退任。更にその他阿利英二氏以下92名の再任。

▽役員人事に関する件

宇野重昭評議員は理事・常務理事に新任。岡宏子評議員は理事・館長に新任。なおこれに伴い中川秀恭理事長は館長の兼務が解かれ理事長専任となった。また、飯田宗一郎理事は理事を退任し、特別顧問に就任した。更に有馬朗人、佐野博敏、末松安晴の3名の理事はそれぞれ常務理事に新任。最後に専務理事と常務理事3名、理事20名、監事2名は再任された。

第74回理事会・第54回評議員会

'90年4月5日／学士会館・本郷分館

〔出席者〕

（理事）中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、村山松雄、小岩健介

（評議員）岡宏子、加納六郎、原卓也、竹内正幸、宇野重昭、朝倉孝吉

委任状による者＝理事一三名、評議員七七名（敬称略・順不同）

◇

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり、議事が進められた。小岩専務理事から各議案について逐次、提案説明が

清艶なシンボルとして

板垣　興一

深緑の森の丘に新しい風が吹く。何よりもまず、岡宏子先生が館長に就任されたことを喜びたい。

大学セミナー・ハウスが創立されてからはや四半世紀。この間、実に多くの方々の善意と熱意に支えられて、国・公・私立大学を包摂したユニークなインターユニヴァシティとして、生きた学問共同体に成長した。そしてこの成長の軸心は、ほかならぬ時代の動き、社会の変化をさきどりした発想と問題意識にもとづく「共同セミナー」の数々の斬新な企画だった。そこでは先生も学生も裸のつき合いで、率直に対話し討論し、魂と魂とのはげしいぶつかりあいのなかから、次の時代を担う若い魂が目覚め育ってゆく。躍動する「生命の泉の園」――これがセミナー・ハウスの原点ではなかろうか。

新しい風はやがて丘を揺るがす変革の新しい波を喚び起こすであろう。生命の泉の園の清艶なシンボルに、限りなく熱い期待をこめて。

大学セミナー・ハウス評議員
八千代国際大学長・一橋大学名誉教授

平成元年度一般会計収支計算書
（平成元年４月１日より平成２年３月31日まで）

（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
基本財産運用収入	131,787	人件費	121,548,725
会員校会費収入	58,400,000	施設管理費	22,585,913
事業収入	172,724,183	その他の管理費	27,335,102
施設改修協力金	9,920,780	一般事業費	18,739,487
セミナー会費収入	4,180,940	普通セミナー事業費	27,370,472
補助金等収入	8,366,000	学生指導セミナー事業費	9,446,942
寄付金収入	876,875	国際セミナー事業費	3,061,764
雑収入	7,123,229	繰入金支出	77,194,744
特定預金取崩収入	54,500,000	その他の支出	6,074,077
繰入金収入	7,505,706		
当期収入合計(A)	323,729,500	当期支出合計(C)	313,357,226
前期繰越収支差額	19,189,720	当期収支差額(A)－(C)	10,372,274
収入合計(B)	342,919,220	次期繰越収支差額(B)－(C)	29,561,994

平成２年度一般会計収支予算書
（平成２年４月１日より平成３年３月31日まで）

（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
基本財産運用収入	152,000	人件費	114,487,000
会員校会費収入	58,400,000	施設管理費	49,945,000
事業収入	183,444,000	その他の管理費	24,778,000
施設改修協力金	10,492,000	一般事業費	19,290,000
セミナー会費収入	3,499,000	普通セミナー事業費	41,710,000
補助金等収入	8,152,000	学生指導セミナー事業費	10,070,000
寄付金収入	500,000	国際セミナー事業費	3,464,000
雑収入	5,832,000	固定資産取得支出	23,700,000
繰入金収入	5,973,000	予備費	5,000,000
当期収入合計(A)	276,444,000	当期支出合計(C)	292,444,000
前期繰越収支差額	29,200,000	当期収支差額(A)－(C)	△16,000,000
収入合計(B)	305,644,000	次期繰越収支差額(B)－(C)	13,200,000

あり、それぞれ質疑が交わされ、審議の結果、可決承認された。

▽準協力会員校加入の件

東京純心女子短期大学の加入

▽評議員人事に関する件

学長交替に伴う東京工業大学長末松安晴、一橋大学長塩野谷祐一、学習院大学長早川東三、淑徳大学長長谷川匡俊、明治学院大学長福田歓一、東京電機大学長岡村総吾の各氏の新任と田中郁三、川井健、安田元久、那須宗一、森井真、中野道夫の各氏の退任。

▽役員人事に関する件

学長交替に伴う前東京工業大学長田中郁三、前一橋大学長川井健の両氏の退任と末松安晴、塩野谷祐一両氏の新任。

▽平成２年度事業計画案及び収支予算案に関する件

収支予算書については別掲予算書のとおりである。宿泊利用延人員は昨年と同様の五万三、〇〇〇人と設定し、協力会員校会費、施設利用料金等については昨年度に引き続いて据え置きとする。また、当ハウスの〝目玉〟にもなっている清潔なベッド・メイクを維持するために必要な作業要員を確保する。施設・設備の老朽化に対応しつつ、施設・設備の整備、充実を図る。以上の三点を重点に予算編成に当った。

なお、大学教員懇談会が主体となって実施している「大学教員の研修」は、昨年度、千葉大学の「大学教育方法等改善経費」の応援を得て実施されたが、今年度は同様の方法で、東京工業大学の協力が得られることになった。

▽「王樹会」特別養護老人ホーム建設に伴う件

前回報告の後を受けて、八王子市側の要請どおり、建設に当っての道路利用には当ハウスとしても協力を惜しまないこと、一方、道路利用に当って「王樹会」側の協定、覚書の誠実な履行を確保するため、市側の監督・指導の確約があった旨の報告があり、この具体的な扱いについては理事長に一任した上で承認された。

平成元年度 第３回共同セミナー委員会

'90年3月15日／アルカディア市ヶ谷

〔出席者〕竹内啓、川端香男里、桜井哲夫、小田晋、栗原彬、室田武、坂本百大、坂部恵、袖井孝子、小川捷之、佐藤敬三、進藤栄一、野崎昭弘（敬称略）

◇

第３回委員会は別記一三名の委員に、ハウス側から小岩専務、企画室スタッフ三名が出席して開催された。

竹内委員長が議長となり、以下のように議事が行なわれた。

(1)第149回「祭りと文化」、第150回「ユング心理学―心の深層をさぐる―」、第151回「現代中国の潮流」の各大学共同セミナーの実施報告。

(2)平成元年度プログラムの総括

大学共同セミナー計４回の参加者数は、三〇四名、一回平均で七六名を数えた。この七六名という数字は、この10年間では二番目に多く、第150回、第151回の企画が学生の要求に合致したことによるものである。詳しくは９頁の「白書」参照。

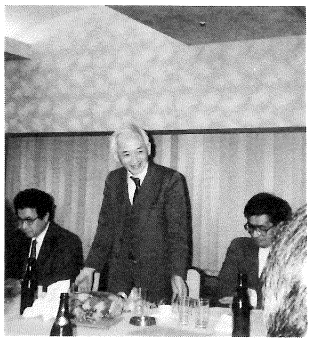
(3)平成２年度プログラムの一部変更について

25年を迎える大学共同セミナーは、意味づけの再検討が必要であり、経費面でも減少する補助金に対応する処置が考えられねばならないが、差し当って、予定していた６回のプログラムを４回に減じ、次のA、Bのカテゴリーに分けて企画したい。

Ⓐ大衆化した大学教育には、学生の〝心〟の準備教育が必要であるので、それに応える内容を強化する。

Ⓑ従来の大学院共同セミナーはそのまま残し、論理的思考を育む場として高度な内容をもつものを１～２回実施する。

以上の事務局案を承認した。



退任の挨拶を述べられる竹内委員長

千人会

'90年3月～5月

◇現在会員一、四七二名（実会員数）
（通算入会者一、八二一名）

◇新しく会員となられた方々
B　北海道大学助教授　坂井　昭宏殿

◇会費ありがとうございます
平野鉄太郎、絹川正吉、柘植敏治、一松信、秋間実、朝倉弘之、豊田陽子、冨子勝久、那須宗一、松崎義徳、熊澤義宣、宮腰賢、藤木宏幸、山口耕次、河田喬夫、福島重美、永野賢、昌谷春海、勝見允行、五唐勝、杉浦銀治、安藤英治、山澤逸平、高橋誠、木村建一、磯直道、米満澄、内山正熊、渡辺武雄、白川和雄、寿里茂、井村君江、小原啓義、大西清、松尾弘、富塚文太郎、大泉充郎、市川邦彦、佐久間章行、上田明子、土井恵美子、萩原稔、中村光世、柴田泰比古、中田良平、麻島昭一、人見宏、島田治夫、寺内礼治郎、坂井昭宏、原豊、永井道雄、山田良之助、村井実、河村フジ子、宮本誠二、原一雄、手島修蔵、斎藤幸一郎、吉沢四郎、北村宗彬、茂木光子、高橋正昭、大田未穂、護雅夫、岡村總吾、福西基、鴨沢巌、石坂巌、池田義人、尾田綾子、平澤薫、森山ヨシ子、島田外志夫、木田広、柳父圀近、丸山眞男、春田素夫、高階秀爾、熊坂敦子、望月清司、向坊隆、東洋、瀬部孝、高瀬文志郎、佐藤公孝、檜田信男、佐藤毅、小倉芳彦、村田晴夫、石渡毅、高村弘毅、井出翁、大頭仁、小山五郎、福田一郎、村山松雄、佐藤慶幸、松澤通生、舘逸雄、田中喜久昭、梶原豊、中島直忠、樋口美智恵、手塚喬介、西野万里、池原義郎、大槻盛一、中島康孝、菊地昌典、藤井弥太郎、加藤六美、海老根宏、塩田庄兵衛、江渕浩美、久保田浩、堤彪、染谷恭次郎、石弘光、伊藤意智郎、堀野定雄、高峯一愚、碓井信一、水谷眞智子、深澤俊昭、肥前栄一、安藤賢一、林肇、高木健太郎、関口富左、村田勝彦、渡利千波、矢野洋四郎、大河内正陽、佐伯彰一、水野弘文、西勝、小泉一郎、椿弘次、桐生冨久、山之内靖、板橋定雄、吉利喜美、高橋康之、下森定、伊倉退蔵、清永昭次、横山勝信、木村尚三郎、奥野忠一、向山文雄、井上宇市、原治、村田喜代治、平野由紀子、鈴木達雄、森昭彦、北野弘久、関口忠、冨山芳正、本明寛、後藤捨男、児玉昭太郎、狩野紀昭、峰岸純夫、矢澤大二、岡田英和、加藤晴久、荒井献、鈴木悌二、廣田達衛、小原清成、本吉修二、加藤秀俊、芳賀徹、竹内昭夫、加藤一郎、國分久子、小林保彦、正田亘、今井栄、平野文彦、佐藤経明、山下肇、西村閑也、近藤裕、斉藤芳郎、今井義夫、厚東偉介、大村晴雄、澤島侑子、天城勲、福島明、西澤宗英、佐藤弦、高橋忠次郎、荒井基、栗田見瑞、徳永勇雄、佐藤和男、関根隆光、中川作一、北郁子、長谷川幸男、荒川有史、金子六郎、林卓男、川名明、宮川彰、長岩寛、福山直美、奥山典生、千野熊男、深海博明、徳末愛子、阿部宏、大原栄一。
（敬称略）

◆千人会員からのたより
昨年は大学教員懇談会、記念館落成式、学部生オリエンテーション等、御地を訪れる機会に恵まれました。本年もよろしく願います。
東京学芸大学教授　宮腰　賢
◇
記念館完成おめでとうございます。近いうちに見学させていただきます。
羽島設計　福島重美
◇
62歳の誕生日を元気で迎えることができました。先日、Y先生のお誘いで生れて初めてスキーを楽しむことができ喜んでいます。
東洋大学教授　白川和雄
◇
定年までの最後の一年を頑張りたいと存じます。
上智大学教授　市川邦彦
◇
満80歳の誕生日を迎えました。大学セミナー・ハウスの創設以来関係を持ちました。ご発展を祈ります。
東京教育大学名誉教授　平澤　薫
◇
このところ新しい情報教育プログラムの実施に没頭しています。
立正大学教授　高松正昭
◇
本年も書くこと詠うこと話すことの充実を求めて元気に過ごしていきたいと思っております。
日本女子大学教授　熊坂敦子
◇
目に見えて
松が枝の緑　いや増しぬ
来るべき世を　信じてよきか
大学入試センター教授　中島直忠
◇
入院（開腹手術）のため遅くなりました。
早稲田大学教授　池原義郎
◇

（14頁3段目につづく）

平成元年度千人会会計収支計算書
（平成元年4月1日より平成2年3月31日まで）

（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
会費収入	3,883,000	印刷製本費	33,500
雑収入	49,366	通信運搬費	635,152
		払込手数料	44,730
		雑費	406
当期収入合計(A)	3,932,366	当期支出合計(C)	713,788
前期繰越収支差額	9,758,346	当期収支差額 (A)−(C)	3,218,578
収入合計(B)	13,690,712	次期繰越収支差額 (B)−(C)	12,976,924

大学院共同セミナーが出版物に
『正義と無秩序』坂本百大・長尾龍一編
'90年3月20日発行　国際書院刊
定価三、二九六円

（内容）「自由について」―二一世紀へ向けての分析視角（坂本百大）／内面の自由（長尾龍一）／自由とルール―動物と人間を比較して（桂木隆夫）／現代社会契約論と正義（小林公）／権利基底的道徳（森村進）／法の抱束力―現実主義の視座に立って（佐藤節子）／争われる概念とその解釈―法哲学のための覚書（森際康友）／法をどうみるか―相互主体的視座の確立をめざして（田中成明）他。

(4)平成2年度プログラムの準備状況
(5)その他
3期6年の在任中、4年に亘り委員長の重責にあり、自然科学の方法論や科学技術と社会の問題に切り込んだ企画を次々と立てられた竹内委員長が、本年度で退任されることになり、ハウス側から中川館長に代わり、小岩専務理事が謝辞を述べ、飯田室長が花束を贈呈した。
竹内委員長が退任の挨拶を述べられ、拍手の中で閉会した。

平成元年度 国際プログラム委員会正副委員長会議
'90年2月15日／東京ガーデンパレス
三輪委員長の委員在任12年に亘るご奉仕に感謝する

（出席者）三輪公忠、菊地靖、宇佐美滋、（セミナー・ハウスより）中川館長、小岩専務理事、飯田企画室長
◇
昭和63・平成元年度の国際プログラム委員会は、正副委員長会議を開き、次期委員会の人事を議した。同委員会発足以来の委員として国際学生セミナーをはじめ、国際フォーラムなどにも尽力された三輪公忠・上智大学教授が今期をもって退任されることになった。12年間の在任中、昭和56年度から62年度までを副委員長として、また最後の2年間を委員長として委員会の運営の重責を果たされた同氏に、席上、中川館長より謝辞が述べられた。

業／務／通／信

'90年3・4・5月
花と新緑の丘の合宿研修から

桜、つつじ、そして新緑――この丘が見事に変身する季節の中、今年も春休みの常連グループや各大学のフレッシュマン合宿を迎えた。

●新入生合宿で延べ八、九五五人

新入生の合宿研修（オリエンテーション）は4月初旬から7月中旬まで続く。うち、4・5月中に実施されたクラス単位以上の規模の合宿は、**別表**（15頁）に示すとおりである。合宿件数は58件（32校）、宿泊参加者は延べ八、九五五人、うち教職員は六六五人、ヘルパーを含む上級生は六九二人であった。これは、両月の過去最多で、また同期間の総宿泊者数の64％に当たる。

先輩の体験に学ぶ――津田塾大学英文科フレッシュマン・キャンプ（'90.5.11）

今季初めて実施されたのは、東京造形大学美術学科、同デザイン学科、東京都立医療技術短期大学専攻科、東京外国語大学アラビア語学科、恵泉女学園大学人文学部、東京学芸大学地学教室、同国語教育学科、東洋英和女学院大学人文学部の八グループであった。

●新規加入の「会員校」の利用

東洋英和女学院大学（人文学部人間科学科・社会科学科）と東京純心女子短期大学（音楽・美術・英語各学科）の新入生オリエンテーションは、両校がそれぞれ協力会員校、準協力会員校に加入後の初利用となった。

東洋英和女学院は一八八四（明治17）年にカナダ人宣教師によって開校され、以来百余年の歴史を持つ女子教育の先駆的存在であるが、'89年4月に四年制大学（横浜市緑区）を設立したのを機に会員校に加入された。学長に就任された朝倉孝吉氏が成蹊大学の教授・学長当時からハウスの利用者・協力者であったことのご縁による。そしてこの春、早速新入生オリエンテーション実施の運びとなった。朝倉学長はこの合宿にも熱心に参加された。

東京純心女子短期大学（八王子市滝山町）は長崎県にある純心聖母会（'34年創立）を母体とするカトリック系の学園で、短大は'67年の開学である。音楽、美術両学科に続き'89年4月には英語科が増設された。ハウスの利用は'84年11月以来すで

（13頁3段目よりつづく）

四月より東大を退官、千葉敬愛短大国際教養科に移りました。　菊池昌典

◇

この三月で帝京大学を退職致しました。　高峯一愚

◇

在外研究で一年間、ドイツにまいります。　東京大学教授　肥前栄一

◇

本年三月をもって立教大学法学部を定年退職しました。　高橋康之

◇

本年三月をもって法政大学工学部を定年退職いたしました。セミナー・ハウスの益々の御発展を心からお祈り申上げます。横山勝信

◇

年月が光のように感じられる今日このごろになってきました。　早稲田大学教授　加藤一郎

◇

四月五日、交友館で昼食。とても温かいもてなしを受けました。ありがとうございました。　青山学院大学教授　小林保彦

◇

東大定年後、大阪に移住してはや10年、その間ご無沙汰しましたが、来春は関西大定年、東京での新ポストも決まり、再び帰京しますので、また宜しく願いあげます。　関西大学教授　山下　肇

◇

丁度誕生日の今日ご送金申しあげます。昨年還暦を迎え今年は新しい暦で出発致します。　お茶の水女子大学教授　澤島侑子

◇

今年も幸にも生きてご送金できることを感謝致します。皆様が益々学問の進歩に貢献下さるように。　元法政一高教員　福島　明

◇

昨年滞独中に不惑の年を迎え感慨深いものがありました。それから早くも一年。これからはますます時間が早く流れることでしょう。　杏林大学助教授　西澤宗英

◇

ことしも健康に留意して〈文学と教育〉の問題に取り組んでいきたいと思っております。　国立音楽大学　荒川有史

故山田良之助先生を偲ぶ

山百合の芳香が漂う　多摩の丘の思い出

当ハウス旧職員　**土田　美芳**

夏がくれば想い出すS・Hの白い百合、七月に入る頃この丘を訪れる学生諸氏は、キャンパスの各所に、山百合の花が点々と咲き香っているのが眼にとまるであろう。そしてS・Hをより深く感じ、良き想い出の一つとされるのではあるまいか。

思えば25年前のあの丘は、造成工事の為に丸裸、そこに七つの宿舎群が寄り添っているだけで、風情も何もなかったことは、その頃の写真が物語ってくれる。

当時の会員校16大学の一つ、武蔵工業大学の学長山田良之助先生は、この殺伐たる風景を嘆かれ、或る日突然20人ほどの学生を同行、百個の山百合の球根を学生と一緒に植えつけられたのである。

白百合の花に魂を込めてS・Hを愛してくださった山田先生のご逝去を知ったのは、「六月十三日早朝」との新聞紙上だった。奇しくも丘の白百合のつぼみが大きくふくらんでいる時である。

「S・Hの百合と山田先生」の拙案は実は数年前から温めていた。幸いそれが紙上にのって先生のお眼にとまれば、せめてもの小意を汲んでいただけると。痛恨の限りとは正にこの事と、悔いているこの頃である。

来館の度に声をかけてくださった温容は、あの丘に20年以上咲き続けている白百合の花と共に、幾許の余命ある限り忘れられない。

近日中にS・Hを訪れ、丘の白百合と共に、思いを新たに先生のご冥福を祈る所存である。　（六月十八日）

＊　＊

故山田良之助先生は、亡くなられる三ヵ月前の3月16日付で、第21回目の千人会費を振込用紙で送金して下さっている。当ハウス初代業務課長の土田美芳氏が追悼文を認めて持参されたので、ここにご紹介して先生のご霊前に捧げるものである。

に六年。「卒業修養会」「新入生オリエンテーション」「英語合宿」などを積極的に実施されている。山田雅子学長を中心に、家庭的な雰囲気が印象的である。本号の『**わたしたちの合宿**』では、これを機会に、当初より合宿運営に熱心に係わってこられた妙摩光代先生から、同校がオリエンテーション・キャンプで目指すものとその成果をご紹介いただいた。

●「オリエンテーション」への反省と工夫と

大学紛争を契機に、新入生オリエンテーションが実施されるようになったのはハウスが開館して二年後の'67年である。毎年継続して、すでに20年を超える大学も多くなった。近年、「その方法について過渡期を迎えている」「大きな脱皮を要する時が来た」など、教師の一部から、従来の合宿研修の在り方の見直しが聞かれるようになった。また、学生の意識や気質の様変わりや大学のレジャーランド化などが指摘されて久しい。

しかし、他方、この短期日のセミナー合宿を効果あらしめるため、プログラムの建て方などに各大学がさまざまな工夫と努力を加えてきているのも事実である。その中から二、三の事例を紹介したい。

❶「先輩に聞く」――当該学科の卒業生を各界から招き、パネルディスカッション等の形式で体験を聞く（東京純心女子短大、日本女子大社会福祉学科、津田塾大英文・国際関係両学科など）。津田塾大の場合、教師、編集者、OL等のほかに、タイの農村を実体験した先輩の報告も聞いた、❷「オリエンテーリング」――ハウスの地形や建築（のディテール）を活かした歩行ラリーが好評。チームワークを競わせて接触・交流を促進す

平成2年4・5月
新入生オリエンテーション合宿実施状況

学校名	参加者数（人）
●4月	
東京薬科大(新入生歓迎キャンプ)	*241 〈118〉
東京工芸大・建築学科	142（17）〈6〉
立教大・観光学科	152（4）〈20〉
共栄学園短大・生活学科	167（17）
東京造形大・美術学科	122（24）
東京造形大・デザイン学科	268（34）
東京学芸大・幼稚園教育科	27（4）〈2〉
杏林大・保健学部	*132（6）
東京都立大・機械工学科	85（10）
東京学芸大・国際文化教育課程	122（17）〈8〉
学習院大・学生相談所	45（3）〈17〉
日本女子大・家政経済学科	101（11）〈2〉
東京純心女子短大・音楽、美術、英語学科	260（25）
東京薬科大・薬学部	79（2）〈2〉
職業訓練大・生産機械工学科	38（4）
東京コンピュータ専門学校	238（16）〈5〉
東京コンピュータ専門学校	239（12）〈3〉
東京薬科大・薬学部	154（2）〈3〉
東京都立医療技術短大・専攻科	81（11）
東京都立商科短大・経営学科II部	128（15）〈26〉
日本女子大・社会福祉学科	140（14）〈6〉
東京薬科大・薬学部	151（2）〈4〉
東京外国語大・アラビア語学科	33（4）〈7〉
東京薬科大・薬学部	152（2）〈4〉
十文字学園女子短大・家政専攻	249（9）〈124〉
東京都立医療技術短大・一般学科	222（45）
東京職業訓練短大・機械系	94（14）
恵泉女学園大・人文学部	244（26）〈2〉
慶應義塾大・国際センター（留学生）	82（12）〈45〉
立教大・ドイツ文学科	59（7）
●5月	
武蔵工業大・電子通信工学科	148（16）〈25〉
武蔵野外語専門学校	52（5）
東京電機大・情報科学科	129（11）〈22〉
東京都立立川短大・家政、食物学科	130（23）
津田塾大・国際関係学科	313（22）〈7〉
津田塾大・英文学科	268（18）〈16〉
東京都立商科短大・商学科II部	145（15）〈29〉
東京学芸大・理科教育教室	19（2）〈2〉
東京学芸大・地学教室	36（5）〈4〉
東京学芸大・化学教室	37（3）〈3〉
東京学芸大・生物学教室	40（4）〈3〉
東京学芸大・物理学教室	32（3）〈2〉
東京学芸大・文化財科学専攻	33（2）〈2〉
東京学芸大・自然環境科学専攻	55（7）〈3〉
東洋英和女学院大・人文学部	266（18）
東京都立商科短大・商学科	299（20）〈43〉
文京女子短大・英語英文学科	362（10）
文京女子短大・英語英文学科	306（12）
東京都立科学技術大・機械システム工学科	53（8）
東京学芸大・教育情報科学専攻	48（3）〈3〉
東京学芸大・数学教育学科	135（7）〈7〉
明治学院大・社会学部II部	106（13）〈5〉
文教大学女子短大部・英語英文学科	*268（18）
東京都立大・物理学科	58（8）〈26〉
東京都立大・数学科	62（11）〈31〉
東京都立大・化学科	93（10）〈55〉
白梅学園短大・保育科	278（21）
東京学芸大・国語教育学科	35（1）
計 58グループ（32校）	8,053(665)〈692〉

（注）参加者数の（　）内は教職員，〈　〉内は上級生でともに内数。＊は2泊，他は1泊，実施順。なお，参加者の延べ人数は，8,955(698)〈810〉である。

私の国際交流

セミナー・ハウスで春が始まる

東京大学教養学部比較文学比較文化研究科
アンナ・ミハルスカ

私がはじめて大学セミナー・ハウスで行なわれた合宿に参加したのは一九八七年三月二一日でした。私は前の年にポーランドのワルシャワ大学の日本語学科を卒業して東京大学の比較文学比較文化の研究生として日本に来ました。

ワルシャワの日本語学科はよく合宿をやっていました。私たちは美しくて環境のいい、山の方それも富士五湖のような所を選び、民宿を借りて、一週間はそこで勉強したり遊んだりしました。いつもとても楽しかったので私は八王子の合宿も大変期待していました。来日してからちょうど半年が経って、やっと日本の生活になれて来ました。といっても四季の感覚だけは相変わらず乱れていました。ポーランドの四季の方が日本のよりずっとはっきりしているので、雪の積らない、木の葉の落ちない冬の後で、春が来ないのではないかとがっかりしていました。

セミナー・ハウスでの合宿はとても楽しかった。教室は広くて、住む所は居心地がよくて、キャンパスは大変便利でした。大学院の先輩の発表、先生方の講義を聞くことはとても勉強になりました。懇談会の時に皆と親しくなって、つい一晩中夜明けまでおしゃべりしてしまいました。そして朝部屋に戻ろうとした時、私は日本の春を発見しました。私はセミナー・ハウスの美しい環境に強く心を打たれました。広々とした空間に若葉、なにげなくて美しい春の花、セミナー・ハウスのキャンパスは私に日本の春のよさを教えてくれました。私はうっとりして鳥のさえずりを聞いていました。その後毎年私は比較文学比較文化の合宿に参加しています。月日はいつも三月二一日です。その日にセミナー・ハウスに行かなければ、私にとって春が始まらないような気がします。最近環境問題は話題になって来ましたが、八王子のセミナー・ハウスは、まさに心から安らぐ、勉強に最適な場所であると思っています。

4年連続で合宿に参加して('90.3.21)

る。今春は実施校の増加が目立った（都立医療技術短大専攻科、東京電機大情報科学科、武蔵野外語専門学校、明治学院大社会学部Ⅱ部など）、❸「先輩からの贈物」――リコーダー・アンサンブル、マンドリン演奏。野外ステージの利用も（東京純心女子短大、十文字学園女子短大など）。ほかに、合宿の往路にNHK放送博物館見学、帰路に高尾山へのハイキングを組んでいる武蔵工大電子通信工学科の例などがある。

さらに、学長自身が参加され、新入生と親しく交わる機会を持ったことが、合宿の効果を高める要因となったことは言うまでもない。4月、5月には11校の学長・校長が来館されている。

●研究者レベルの二つの国際交流

4月初旬に日中の国際集会が開かれた。「日中境界要素法シンポジウム」で、中国から来日した8名と国内16大学の研究者ら計44名がインターナショナル・ロッジ（記念館）に四泊した。

東京大学「比較文学・比較文化」21年目の春合宿には今年も東西六ヵ国（ポーランド、ベルギー、西独、米国、中国、韓国）からの留学生・研究者が日本人学生と交わり、芳賀徹・平川祐弘・小堀桂一郎各教授らの指導のもとに研究発表と討議に参加した。ポーランドのアンナ・ミハルスカさんはワルシャワ大学の日本語学科を卒業後来日、'87年以来四年連続この合宿を体験された。『**私の国際交流**』欄（15頁）に一文をお寄せいただいた。

食堂で――初利用の恵泉女学園大学人文学部新入生フェローシップ（'90.4.28）

●開館25周年、ハウスOB三氏の再来

学生時代にこの丘を利用された方々も今や各方面で活躍中である。その中からこの春来館された三氏を紹介する。❶星野珙二氏。開館当初、早稲田大学理工学部の学生で、共同セミナー参加など約10回利用。現在福島大学経済学部経営学科教授。春休みを利用して学生四名とゼミ合宿をした（3度目、17頁に**写真**）。❷高井雅彦氏。一橋大学山澤逸平ゼミ、読書会、国際学生セミナーなどの合宿参加約8回。現在三菱銀行新宿新都心支店勤務。来年予定の欧米留学をひかえ、黄金連休をハウスに〝山籠り〟して「日米経済摩擦と日本経済」の論文作成に取組んだ、❸並河一道氏。東京教育大学2年の夏、開館記念の第一回大学共同セミナーに参加。東大物性研（この間ハウスで研究会2回）を経て'87年に東京学芸大学へ。現在物理学教室助教授。新入生合宿研修で3回、研究室のセミナーで2回、ハウスを利用。5月の来館時にセミナー・ハウスの意義や共同セミナーの役割の重要性を文章に綴って下さっているが、紙面の都合で割愛し、次号でご紹介する予定である。

わたしたちの合宿

新しい人生のために
――心の触れ合いを求めて――

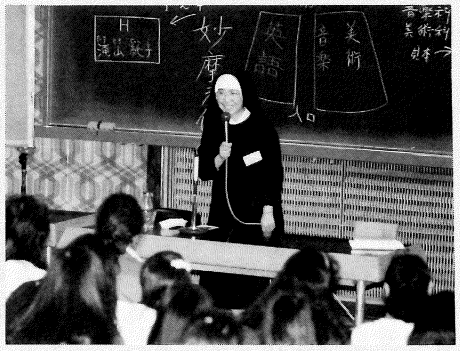
東京純心女子短期大学助教授
妙摩光代

人生八十年。その中の3％にも満たない短大での二年間、学生たちはさまざまな可能性の中から本学（東京純心女子短期大学）を選んだ。今、新しい出会いと新しい歩みが始まった。この青春の季節を完全燃焼させ、社会へ飛翔するステップとしてエネルギーの蓄積が出来れば、この出会いは密度の濃い充実したものとなるであろう。

そこで、本学では例年四月中旬から下旬にかけて、一泊二日の新入生オリエンテーション・キャンプをこの丘で実施している。「学園を知り、師を知り、友を知る」とのテーマのもとにスケジュールが組まれる。本学はカトリック・ミッション・スクールであるが、クリスチャンの学生は少ない。従って建学の精神に基づく教育理念・教育目標・学園の沿革を知らせることから始まり、学生と教員、学生相互の心の触れ合いを求めて二日間が展開される。

その結果は、殆どの学生にとって「友を知る」チャンスとなったようである。キャンプ後のアンケート調査によると、「このキャンプで得た最大のものは」との質問に「人との交流、友情を深めた」と回答した学生が90％にも達したのである。これに対し、「先生を知り、学風を知った」と答えた学生は僅かに6％に過ぎなかった。これからの二年間、机を並べ学び合う友との交流を深めたことは意義深く、このキャンプは成功したと言える。若者にとって、友人こそ青春の軌跡を描く最高の素材であり、人生を語り合う道づれなのである。このように短大生活の第一歩をX軸（友）上での交流から始めるが、日が経つにつれ、Y軸（師）へと広がりを見せてくる。やがて、平面構成は立体構成へと展開し、人生観、世界観を確立する。こうして深みのある人間となり、社会へ巣立って行く。大学の使命は知識、技術の切り売りだけではない。グローバルな視野の下に人生を考え、己が使命を自覚し、生きる力を与えることでもある。

大学生活のスタートに当たり、緑豊かなこの丘で、「簡素にして高潔」のモットーのもとに寝食を共にしたことは、演出効果を十二分に高めたと思う。なお、ハウスの方々の温和な言動と濃やかなお心遣いが、このキャンプを楽しいものにして下さったと感謝している。



「学園を知り，師を知り，友を知る」をテーマに
――開講式の妙摩助教授（'90.4.16）

利用状況

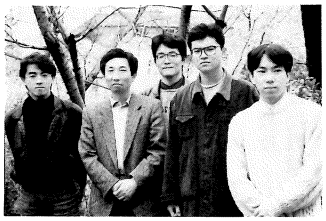
＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用
個人利用、日帰りを除く

■3月（94グループ、延四、六〇七人）

東京経済大学文化会リーダーズマン・キャンプ
早稲田大学教授　示村悦二郎
東京学芸大学助教授　井口　太
東京大学教授　芳賀　徹
早稲田大学教授　鈴木　恂
芝浦工業大学教授　佐藤　敏彦
東京学芸大学生活協同組合
横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
東京外国語大学教授　山之内　靖
国際基督教大学助教授　小谷　英文
法政大学弁論部ディベート委員会
東京学芸大学助手　伊藤　一男
国際基督教大学教授　三宅　彰
慶応義塾大学生協大学院生委員会
明治大学教授　山本　敏
東京外国語大学教授　中嶋　嶺雄
早稲田大学理工学部英語会
上智大学助手　土橋　茂樹
青山学院大学教授　原　豊
早稲田大学人間科学研究会
青山学院大学助教授　関田　寛雄
東京大学比較文学・比較文化研究会
東京薬科大学新歓祭実行委員会
早稲田大学絵画会　関口　雅夫
駒沢大学教授　吉田　優治
千葉商科大学講師　大村　雅彦
中央大学助教授　岩田　末廣
慶応義塾大学教授
成蹊大学文化会リーダース・キャンプ
早稲田大学雄弁会　熊谷　彰矩
青山学院大学教授　川本　勝
駒沢大学教授
東京薬科大学軟式テニス春季合宿
学習院大学シェイクスピアドラマソサイエティ　鳥越けい子
法政大学講師　野崎　守英
中央大学教授　荒木昭次郎
東海大学教授　塩田　勉
早稲田大学教授　熊本　一規
明治学院大学講師
杉野女子大学短期大学部教授　田村　皖司
芝浦工業大学教授　十代田知三
千葉大学助教授　佐藤　宗子
千葉大学助教授　工藤　秀明
青山学院大学教授　大谷登士雄
桜美林大学教授　大庭　篤夫
大阪大学助教授　西本　和俊
創価大学助教授　佐藤　完治
CICカナダ国際大学日本事務局
東京松本英語専門学校
青山学院女子短期大学ハンドベル・クワイア　竹田いさみ
独協大学助教授　望月　清司
専修大学学長　竹林　代嘉
専修大学教授　宮川　淑
独協大学教授
郡内研究会
第16回国際学生セミナー報告書編集委員会
第151回大学共同セミナー
FDプログラム小委員会拡大会議
パターナリズム研究会
フランス語教育振興協会
現象学的社会学研究会
青年心理学研究会
東京都高等学校教職員組合学校司書対策委員会
日本機械学会MA研究会
日本キリスト教団原町田教会
朝日カルチャーセンター
文学教育研究者集団
コニカ＊＊
不二越
プレスタイム
東芝FAシステムエンジニアリング
ニチヨシ
生活協同組合都民生協
沖電気工業＊
ウチダユニコム＊
小松ゼノア
白洋舎
日本電気
中央スバル自動車＊
東芝エンジニアリング
東京ゼネラル
多摩中央信用金庫
スーパーアルプス
キャノテック
相原冷菓
昭和飛行機工業
光印刷

■4月（111グループ、延七、九三二人）

千葉大学教授　野澤　敏治
早稲田大学教授　市川　孝正
明治大学教授　小笠原英司
法政大学教授　船山　栄一
東京学芸大学助教授　山田　有策
中央大学助教授　中川洋一郎
東京薬科大学新入生歓迎キャンプ
明治大学教授　西野　萬里
青山学院大学教授　小林　保彦
東京工芸大学建築学科新入生オリエンテーション　深沢　実
青山学院大学教授　中村　達也
千葉大学教授　鳥居　伸好
横浜国立大学講師　片桐　伸夫
駒沢大学助教授
立教大学観光学科新入生オリエンテーション　河野　博忠
中央大学教授　森田　明
お茶の水女子大学教授　武蔵　武彦
千葉大学助教授　木島　淑孝
中央大学教授　佐藤　健二
法政大学助教授　高井　徹雄
駒沢大学助教授　深沢　実
早稲田大学講師　伊藤　壽英
中央大学講師　池上　一志
中央大学教授　杉浦　智紹
駒沢大学教授
東京学芸大学幼稚園教育科新入生オリエンテーション
杏林大学保健学部フレッシュマン・セミナー　平野健一郎
東京大学教授
東京都立大学機械工学科新入生ゼミ　内田　満
東京学芸大学国際文化教育課程一年生合宿研修　宇野　重昭
早稲田大学教授
成蹊大学教授
学習院大学学生相談所フレッシュマンキャンプ
日本女子大学家政経済学科新入生オリエンテーション　瀬戸岡　紘
駒沢大学教授　星野　珙二
明治大学助教授　森　久
東京純心女子短期大学音楽・美術・英語科新入生オリエンテーション
東京薬科大学薬学部フレッシュマンキャンプ＊＊＊　秋山　智久
明治学院大学教授
東京都立医療技術短期大学専攻科新入生オリエンテーションキャンプ
東京都立商科短期大学経営学科第二部新入生オリエンテーション　高柳　先男
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション　笹森　健
中央大学教授　日向野幹也
青山学院大学助教授　柳田　辰雄
東京都立大学助教授
東京都立大学助教授
東京外国語大学アラビア語学科新入生合宿オリエンテーション　栗山　盛彦
千葉大学教授　赤松　泰輔
工学院大学教授
東京都立医療技術短期大学新入生オリエンテーションキャンプ
東京経済大学税理士受験会　吉田　恒雄
明星大学助教授　秋山　三郎
東京農工大学教授　大久保治男
駒沢大学教授
慶応義塾大学国際センター新入留学生オリエンテーションキャンプ
帝京大学ESS　熊谷　文枝
杏林大学教授
東京大学教授　村瀬　孝雄
立教大学ドイツ文学科一年生合宿オリエンテーション　星野　珙二
福島大学教授
佼成学園高等学校数学研究同好会
東京都立工業高等専門学校リーダー研修会
和光中学校
共栄学園短期大学生活学科一年次合宿オリエンテーション
東京造形大学美術学科新入生オリエンテーション
東京造形大学デザイン学科新入生オリエンテーション
神奈川大学助教授　堀野　定雄
職業訓練大学校生産機械工学科新入生セミナー
東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション＊
十文字学園女子短期大学家政専攻新入生交歓会
東京職業訓練短期大学校機械系新入生セミナー
恵泉女学園大学人文学部新入生フェローシップ
言語研究会
現代資本主義研究会
日本コトバの会
東京多摩いのちの電話
国際教育交流協会
心理科学研究会
第3回日中境界要素法シンポジウム
ルソール合奏団
双葉会
教育技術を考える会
聖書キリスト教会
ナチュラリスト環境教育センター学究社
ウチダユニコム
東芝システム・インテグレーション開発部
市光工業
アスター精機
ニッポンティーポール
エイ・エス・ティ
山久特殊硝子工業
山万



早野珙二・福島大学教授（左から2番目）とゼミ生（'90.4.2）

鴻池組
日電アネルバ＊＊
日本電気
ベルモント化粧品
小松ゼノア
石川島播磨重工業
ヒューマンライフセンター

■5月（88グループ、延六、〇七六人）

中央大学助教授＊　米田　貢
武蔵工業大学電子通信工学科新入生歓迎セミナー
日本大学芸術学部朗読研究会
上智大学教授　松本　栄二
中央大学経済学会
芝浦工業大学電子計算機研究会
学習院大学教授　斉藤　孝
学習院大学シェイクスピアドラマソサイエティ
日本大学教授　北野　弘久
日本女子大学地域ケア研究会
東京経済大学教授　箸方　幹逸
駒沢大学助教授＊　谷敷　正光
千葉商科大学講師　栗山　盛彦
東京電機大学情報科学科新入生オリエンテーション
東京都立立川短期大学家政・食物学科新入生歓迎セミナー
津田塾大学国際関係学科フレッシュマン・キャンプ
津田塾大学英文学科フレッシュマンキャンプ
芝浦工業大学教授　高橋　清
東京都立商科短期大学商学科第二部新入生歓迎オリエンテーション
東京学芸大学理科教育教室新入生合宿研修
東京学芸大学地学教室新入生合宿研修
東京学芸大学化学教室新入生合宿研修
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
東京学芸大学文化財科学専攻新入生合宿研修
東京学芸大学自然環境科学専攻新入生合宿研修
千葉商科大学教授　菅沼　憲治
立教大学助教授　中江　幸雄
東京都立大学教授　馬場　宣良
東洋英和女学院大学人文学部一年生オリエンテーション合宿
東京都立商科短期大学商学科新入生歓迎オリエンテーション
法政大学助教授　陣内　秀信
文京女子短期大学英語英文学科新入生セミナー＊
東京都立科学技術大学機械システム工学科新入生オリエンテーション
東京学芸大学教育情報科学専攻新入生合宿研修
東京学芸大学数学教育学科新入生合宿研修
武蔵工業大学教育実習事前セミナー
明治学院大学社会学部第二部フレッシュマン・キャンプ
明星大学講師　山本　淳一
東京理科大学教授　富澤　稔
早稲田大学教授　成田誠之助
法政大学教授　下斗米伸夫
埼玉大学助教授　森　泰親
文教大学女子短期大学部英語英文学科フレッシュメンセミナー
東京都立大学物理学科新入生オリエンテーション
東京都立大学数学科新入生オリエンテーション
東京都立大学化学科新入生オリエンテーション
東京経済大学教授　村上　勝彦
日本大学教授　高瀬　暢彦
日本女子大学教授　中嶌　邦
東京都立大学助教授　持田　信樹
東京工業大学助教授　原科　幸彦
東京理科大学教授　狩野　紀昭
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーションセミナー
東京学芸大学国語教育学科新入生合宿研修　布施　濤雄
桜美林大学講師
武蔵野外語専門学校新入生オリエンテーション
桜美林大学体育文化団体連合会リーダースキャンプ
東京商船大学機関学科3年生オリエンテーション
大学生協東京地方連合会
SDA原宿ユースセンター
朝日カルチャーセンター同窓会
高橋聖書研究会
日加柔道交流
東京言友会
工業所有権研究会
市光工業
トーヨーサッシ
キャノン
アドホクラット
ウチダユニコム
ヘアーサロンフェーセス
住友ビジネスコンサルティング
NTTラーニングシステムズ
日電アネルバ
日本電気
日本インフォメーション・エンジニアリング
シグマシステム
小松ゼノア

●予　告●

●第17回国際学生セミナー

主題：地球時代の生き方を求めて―開発と環境―
期日：1990年10月26日～28日（金～日）

◇ゲスト・スピーカー
自然と人工の物質とエネルギーの循環の系
日本野生生物研究センター理事長　佐藤大七郎氏
日本の経済発展と森林利用
筑波大学社会工学系助教授　北畠佳房氏
◇コメンテータ　フィリピン公使（予定）

◇セクション演習
A．環境保全と日本のODA政策
東京国際大学商学部教授　松井　謙氏
国際協力事業団国際協力専門員　桜井国俊氏
B．NGOと地球環境保護
明治学院大学国際学部助教授　熊本一規氏
廃棄物を考える市民の会代表　井手敏彦氏
サヘルの会事務局長　永岡宏昌氏
生活クラブ生協理事長　河野栄次氏
C．開発と文化変容
早稲田大学理工学部教授　菊地　靖氏
亜細亜大学経済学部助教授　豊田由貴夫氏
D．ソ連・東欧の政治と環境問題
法政大学法学部教授　下斗米伸夫氏
［運営委員］
（委員長）東京大学教養学部教授　渡辺昭夫氏
他4名。

●第153回大学共同セミナー

主題：日本人は〈豊かな社会〉を作れるか
期日：1990年11月9日～10日（金～土）

◇全体講義
Ⅰ．「豊かさ」とは何か
東京大学先端科学技術研究センター教授　竹内　啓氏（運営委員）
Ⅱ．「豊かな社会」の生き方
――あなたは「快人」か――
慶応義塾大学商学部教授　井原哲夫氏

◇シンポジウム
Ⅰ．ライフスタイルは多様化するか
お茶の水女子大学家政学部助教授　袖井孝子氏（運営委員）
Ⅱ．データが語る日本の「豊かさ」
総務庁統計局統計情報課長　菅原眞理子氏
Ⅲ．資本主義は豊かさを保障するか
一橋大学経済学部教授　室田　武氏（運営委員）

◇分科会（上記5名による）

◇問い合わせ先＝企画室☎0426-76-8532（直通）

●編集後記●

本号では3月から5月までの諸活動や平成元年度の「白書」をご報告していますが、6月1日付で岡宏子先生が館長に就任されるというビッグニュースにより、巻頭には急きょ新館長の「ご挨拶」を掲載しました。岡先生がその中で表現されているハウスの「大きな財産」を代表して、板垣興一先生に岡館長へのメッセージをお寄せいただきました（11頁）。7月25日にネパールにお発ちになる10日程前にお願いしたことではありましたが、詩情の漂うメッセージが数日後に届き、編集子を感激させました。板垣先生が「生命の泉の園」と称して下さっているハウスの原点と、四半世紀を経たハウスの今後に思いを馳せながら、本号の編集を終えました。（能）

表紙の写真＝新入生オリエンテーション合宿のひとこま（十文字学園女子短期大学）――野外ステージ

「セミナー・ハウス」一一九　一九九〇年七月二五日号
発行＝財団法人大学セミナー・ハウス　〒一一九二-〇三　東京都八王子市下柚木　☎〇四二六-七六-八五一一　編集＝大学セミナー・ハウス企画室／編集・発行人＝岡　宏子／制作＝中央公論事業出版